

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

藤田 晴央\*

Johanna Spyri : the heart behind landscapes  
—Focusing on “Heidi”

Haruo FUJITA

Key words : 風景 landscape  
山岳文学 mountain literature  
アルム Alm  
帰郷 homecoming  
悔い改め repentance

ヨハンナ・シュピリの『ハイジ』<sup>1</sup>は、巷間に“アルプスの少女ハイジ”としてよく知られている。高畑勲監督によって映像化されたテレビアニメ<sup>2</sup>は日本のみならずヨーロッパでも人気を博しており、その影響は大きい。無論、テレビアニメのみならず原作の読者も多い作品である。その作品の解釈は、主人公ハイジの成長物語と周辺の登場人物のハイジとの関わりを通しての人間的な気づきが中心となっている。

\* 東北女子大学（非常勤）

<sup>1</sup> 『ハイジ』＝ヨハンナ・シュピリが第一部『ハイジの修業時代と遍歴時代』（1879年）と第二部『ハイジは習ったことを役立てることができる』

（1881年）として発表したものを一つの物語として扱ったもの。第一部のタイトルは、ゲーテの『ウィルヘルム・マイステル 修業時代』『ウィルヘルム・マイステル 遍歴時代』にあやかっただけのもの。シュピリはゲーテを愛読していた。

<sup>2</sup> 『アルプスの少女ハイジ』＝1974年に52話に渡って放送されたテレビアニメ。監督はその後スタジオジブリでも活躍した高畑勲。

しかし、この作品を一少女の成長や登場人物たちの善意の美点だけに注目してはいることは大切なものを通り過ぎていく感がある。

私は『ハイジ』に満ち溢れている〈風景〉にこそ、シュピリ作品の文学的価値の核心があるのではないかと考える。そこには、作者シュピリの身体感覚と一体化した〈風景〉への心のまなざしがある。そのまなざしを通してこそ、この物語は鑑賞されるべきなのだ。

以下に、シュピリの文学を『ハイジ』を中心に、余り知られていないほかの作品も検証しつつ、風景と精神の関係について述べてみたい。

本論の章立ては次の通り。

1. 〈風景〉について
2. アルムという〈風景〉
3. 〈祈り〉と〈悔い改め〉
4. シュピリ作品に変わらずに流れるものとシュトルムとの近似性

翻訳は岩波少年文庫版の上田真而子訳を基

本的に使用。それ以外の場合は該当箇所に記載するものとする。

## 1. 〈風景〉について

『ハイジ』の作者ヨハンナ・シュピリは19世紀のスイスに生きた人である<sup>3</sup>。

シュピリはチューリッヒ湖近くの山間にあるヒルツェル村で育った。角川文庫『アルプスの少女ハイジ』の解説には「チューリッヒ市から南へ約二十キロメートル、静かに紺青の水をたたえたチューリッヒ湖のほとりに、ヒルツェル山という小高い山があります。その山腹にジール川の青い流れを下に見て、ヒルツェル村の家々が平和そのもののように点在しています。」(阿部賀隆)と描かれている。物語はこのヒルツェル村から南東におよそ100Km離れたアルプス山脈の一角が舞台となっている。

物語の冒頭の風景描写をみてみよう。

のどかな、古い、小さな町マイエンフェルトから、一本の小道がのびていました。小道は木の多い緑の野原をとおって、堂々と、いかめしくこちらの谷を見おろしている高い山々までつづいていました。道がのぼりにさしかかると、まもなくあたりは短い草の生えたごつごつした地面になり、山の草花のつよい香りが均ってきます。というのも、この道はそのままアルプスの高原に行くかなり急な道なのでした。

マイエンフェルトはスイス東端にある実在の町。周辺の地形図をみると険しい谷と恐竜の背中のように連なる山脈の間に町や村がある。このため村ごとに方言が違っていたとい

うほどにそれぞれが山に囲まれている。有名なモンブラン、マッターホルンなど4千メートル以上の高峰は北西アルプスだが、東アルプス山脈もドイツ・オーストリアにまで及んでいる。つまり、スイスではいたる所で遠く近くアルプスを望むこととなる。どこにいても「山を仰ぐ」国なのである。

「山を仰ぐ」といえば、太宰治<sup>4</sup>を思い出す。「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」。『桜桃』(1948年)のエピグラフに掲げられた一文。この短い一文の力は「山にむかひて」というところにある。「山を仰ぐ」よりも一歩踏み込んでいる。全身で山に直面している気持ちがある。居住まいをただして山を仰いでいるのである。この一文は、旧約聖書「詩篇第百二十一」の冒頭の詩句である。余程気に入った言葉であったのだろう。太宰はこれを『懶惰の歌留多』(1939年)『正義と微笑』(1942年)と三度引用している。『正義と微笑』では主人公が現状に嫌気がさし悩みつつ日記に記す。「暗澹。沈鬱。われ山にむかひて目をあぐ。わが扶助(たすけ)はいづこよりきたるや」。そう、この詩句は助けを求めている「われ」から発せられている。

「詩篇第百二十一」は次の通り。

われ山にむかひて目をあぐ わが扶助  
(たすけ)はいづこよりきたるや わがたす  
けは天地(あめつち)をつくりたまへるエホ  
バよりきたる エホバはなんぢの足のうご  
かさるゝを容(ゆる)したまはず 汝をまも  
るものは微睡(まどろみ)たまふことなし  
視(み)よイスラエルを守りたまふものは微  
睡(まどろみ)こともなく寝(ねぶ)ることもなからん  
エホバは汝(なんぢ)をまもる者なり(後略)  
(新語訳では「エホバ」は「主」と訳さ

<sup>3</sup> ヨハンナ・シュピリ=1827-1901。スイスの作家。代表作『ハイジ』のほかにも多くの小説を書いている。

<sup>4</sup> 太宰治=1909-1948。作家。『斜陽』、『トカトントン』、『父』、『朝』、『春の枯葉』など多くの小説や戯曲で聖書からの引用を行っている。

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

れている。)

ヨハンナ・シュピリもまた“山にむかひて”『ハイジ』を書いた。おそらく“わが扶助”を求めつつ。

主人公ハイジは、父母を病で亡くし、父方の祖父アルムじいさん<sup>5</sup>のもとに預けられることになる。アルムじいさんはアルプス山麓、それも麓の村デルフリ<sup>6</sup>からまたさらに登ったところにある山小屋<sup>7</sup>に一人で暮らしている偏屈者である。ハイジを連れてきた叔母のデーテによれば、豊かな農園の息子だったのに家を飛び出し「賭け事とお酒で家屋敷までなくしてしまい」、その後、傭兵としてナポリへ行ったものの「脱走してきたらしい。人を殺したから。ええ、もちろん戦争じゃなくて、殴りあいだよ」という人物。息子を事故で亡くし嫁も病死、ハイジは残された孫である。この村人たちから恐れられ敬遠されているア

<sup>5</sup> アルムじいさん＝原文は‘Almöhi’なのでそのまま訳すと“アルムおじさん”となるが、ハイジの祖父という近親性を伝えるためにも、翻訳上は岩波の上田真而子訳の“アルムじいさん”の方がわかりやすい。最も新しい2021年刊行の角川文庫・松永美穂の訳は、それを語る人物の立場に合わせて“アルムのおじさん”という呼称も使っている。関泰祐、阿部賀隆訳の角川版を含めてどの翻訳も原作で‘Großvater’と呼んでいるところは、単に“おじいさん”としている。その呼び方との統一性を考えると日本語訳としてはやはり「アルムじいさん」であろうか。

<sup>6</sup> デルフリ＝標高600メートルのオーバーロッフェルスがモデルとされている。

<sup>7</sup> アルムの山小屋＝オーバーロッフェルスからさらに登った標高1100メートルを超えた高地の牧草地に「アルムの家」が作られ、物語の生活様式が再現されている。

ルムじいさんと両親のいない孤独なハイジが心を通わせる。

物語の始まりではハイジはまだ五歳。初めて山小屋に向かってデルフェル村から登っていくとき、自然の素晴らしさに感動し、着ている服を次々と脱いで下着一枚になって、山羊飼いの少年ペーターや山羊たちと親しく触れ合う。そんなハイジにアルムじいさんも心を開き、二人の山小屋暮らしが始まる。

そのようにしてこの物語においては、ハイジの人間的な成長やアルムじいさんの神に対する考えの変化など主要な登場人物の心の問題が大きな意味を持っているのだが、それとは別に大きな側面がある。それが風景描写だ。たとえばハイジがアルムじいさんの山小屋で初めて朝を迎え、山羊を連れたペーターと共に牧場に行って山々を眺めるところ。

あたりにははるかかなたまでしんとしすま  
りかえています。ただ、ときおりやさしい  
風がかすかに吹くと、一面に咲いている  
たおやかな青いつりがね草や金色に光る  
みやまきんぼうげは、そのほそい莖をそ  
とそよがせて、うれしそうにあちこちにお  
じぎをしていました。(略)ハイジは、こ  
んないい気持ちになったのは生まれては  
じめてでした。お日さまの金の光を、さ  
わやかな空気を、花のやさしい香りを  
思うぞんぶん吸いながら、いつまでも  
こうしているよりほか、なにもねがう  
ことはありませんでした。

アルムじいさんの息子（ハイジの父）で大工をしていたトビアスはデルフリ（スイス方言のドイツ語で「小さな村」）でハイジの母アーデルハイトと結婚したが、わずか二年で建築現場の事故がもとで死亡。ショックを受けたアーデルハイトも数週間後に死亡。その後、赤ん坊のハイジを叔母（アーデルハイトの妹）のデーテが育てていたが、フランクフルトで仕事がみつかったためにハイジをトビアスの

父であるアルムじいさんに預けたというのがことの経緯である。

五歳のハイジは両親のいない淋しさに包まれている。その彼女が麓の町から祖父が住む高原を訪れて山々に出会う描写が前述した箇所である。「いつまでもこうしているよりほか、なにもねがうことはありませんでした。」というこの一節には、ハイジのこれまでの環境が決して幸せなものではなかったことが間わず語りに示されている。『ハイジ』においてまず重要なのは、この風景描写と心理のつながりの細やかさなのである。

古典詩歌の自然観はまた別途に論じられなければならないが、日本文学が意識的に山岳そのものに〈風景〉としての意義を認めたのは明治時代に入ってからではないだろうか。その価値を指し示した著作に志賀重昂の『日本風景論』がある。

これが出版されたのが1894年(明治27)。志賀は古典詩歌における花鳥風月の優美な自然観を脱して、日本で初めて山岳の地形、地質、気候を踏まえながら〈風景〉をとらえた。志賀は日本風景の「絶特なる所因」を“瀟洒、美、跌宕(てつとう)なるところ”<sup>8</sup>として〈山岳風景〉を丹念に活写し、日本人に山の〈風景〉が人間の精神を育てるものであることを認識させた。北村透谷、島崎藤村らのロマンティズムにも影響を及ぼしている。

スイス・アルプスに囲まれて育ったシュペリもみずからを取り囲んでいた〈風景〉から多大な栄養を得て『ハイジ』を書いた。単なる空想的自然賛美ではなく、島本恵也の『山岳文学序説』の表現に習えば「分析と写実」<sup>9</sup>

<sup>8</sup> 志賀重昂『日本風景論』=1894(明治27)の刊行から八年間の間に増訂14版を重ねた。

“跌宕なる”=ここでは「個性をほしいままにした」という意味で使用していると考える。

<sup>9</sup> 島本恵也『山岳文学序説』は「かくの如くにして日本の風土の表現は古典のマンネリズム

を踏まえつつ浪漫的にアルプスの自然を活写したのである。その出版は志賀のそれより14年早い、どちらも近代化が進み国家が激変する時代背景の中で〈風景〉の重要性に意識的にまなざしを向けていた。

登山家であり生物学者でもある伊藤秀五郎は、1934年(昭和9)の随筆「アルプスの山の娘」に『ハイジ』について次のように書いている<sup>10</sup>。

この小説の作者は、ハイジや少年ペーテルを描くことによって、アルプスの自然や生活の一部をも、実に妙に表現しているのである。アミーチスの『クオレ』などと共に児童文学の白眉であるが、また立派な山岳文学でもあると思う。

続けて、日本にも優れた山岳小説が現れてもいいと『ハイジ』を読んでその感を深くした、と記している。

19世紀の山岳小説という観点でみるならば、シュティフター<sup>11</sup>の『水晶』を忘れるわ

---

から脱却し、畿内をモデルとした優美さとは異った面を露呈するにいたる。これは『日本風景論』の一功績であると共に初期の岳人を人跡未踏の山岳へ導いた力でもある。かかる風土に対して日本人はついに伝統的美観を捨てて、自然科学的な、また洋画家的な、分析と写実の融合した眼をもって臨むようになった。」と述べている。

<sup>10</sup> 伊藤秀五郎は北海道大学山岳部以来、日本山岳会においても活躍した登山家。随筆「アルプスの山の娘」はその著書『北の山』(昭和10年、梓書房)に収められている。

<sup>11</sup> アーダルベルト・シュティフター=1805-1868。オーストリアの作家。『水晶』を収めた『石さまさま』『プリギッタ・森の泉』『晩夏』などがある。その小説は精緻な描写による自然の中の人間の営みを畏敬をもって描いたものが多い。

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

けにはいかない。1853年に出版されたこの作品は、アルプスの山間にある小さな村に住む兄妹が峠を越えた大きな村に住む祖父母を訪ねた帰りに大雪のために道を見失い遭難する物語である。峠の森林から兄妹がさまよう標高の高い氷のはりついた岩山など迫真の山岳描写が続く。幼い兄妹の運命を思って心がふるえる名作である。だが、『ハイジ』と異なるのは、『ハイジ』の自然描写が登場人物の内心を反映したものとして描かれているのに対して、『水晶』の自然描写はあくまでも外的な物理的自然でありその厳しい姿である。

そのような角度から見てみると、少年少女向けの善良な物語という思い込みから解放されて、作中人物の内心との関わりにおいて自然を描いた「山岳文学」として『ハイジ』を見つめ直してみることも必要なのではあるまいか。『ハイジ』のみならず多くのシュピリ作品においては、その風景描写が、登場人物とその傍にいる者の心持ちの反映となっていることに視線を注ぎたい。

そうやって楽しいときが過ぎていき、ハイジは高い山々を何度もじいっと見上げていたので、山々にも人間の顔のような表情が見えてくるようになりました。山は、まるで仲のよい友だちのように、なじみになった顔でハイジを見下ろしていました。(松永美穂訳)

シュピリは、山が人間と対話する存在であることを伝えている。

## 2. アルムという〈風景〉

八歳になったハイジは叔母のデーテの仲介で、フランクフルトの裕福な家の足の不自由な娘クララの話し相手として、山を離れその屋敷に住み始める。すぐに帰れると思っていたのに帰らせてもらえないままに月日が流れ、

やがて心を病み体も衰弱し始め、屋敷の主治医クラッセンの判断もあり、スイスに戻される。

スイスに帰ったハイジは、ずっと気にかかっていたペーターの目の見えないおばあさんの安否を確かめるために、デルフリからアルムの山小屋までの「ちょうど半分ほどの高さにある」ペーター一家の住まいに立ち寄る。ハイジは、ここでフランクフルトで与えられた立派な服を脱ぎ捨てて下着姿になってしまう。ハイジがよそ行きの服を脱ぎ捨てるのはこれで二度目である。そこには象徴的な意味が込められている。シュピリは、物質至上主義の虚飾を否定し自然を讃えていると同時に、女の子はかくあるべしという当時のジェンダーの規制にも抵抗している。十九世紀の女性が置かれていた環境を考えるとシュピリは、闊達な自由思想の持ち主であることが感じられる作品でもある。

そして、ハイジは下着姿に赤いショールをまといアルムじいさんの山小屋に向かって歩き出し、山を仰ぐ。

夕日が、まわり一面緑のアルムをかがやかせています。やがて、むこうにシェザブラーナ山の大雪原が見えてきました。そこもキラキラと照り映えています。ハイジは二、三步のぼるごとに立ちどまって、ふりむいてみずにはいられませんでした。(略) ファルニクス山の岩のいくつもの塔が、空にむかってもえただけです。ひろい雪原が真っ赤にかがやき、その上をばら色の雲がたなびいていました。まわりのアルムの草は金色にそまり、岩という岩が、チカチカとかがやく光を発していました。下のほうでは、谷全体が黄金のもやのなかにただよっていました。

岩の輝きや谷のもやなど実際に高山で見たものでなければ書けない文章だ。「夏の夕べ」

と題された章ながら大雪原があり、その雪原が真っ赤に輝いている。草は金色に染まり、岩がチカチカと光っているという。その自然描写に、ハイジの「帰郷」の喜びの感情が練りこまれている。

シュピリが描くのは目前に広がる風景ばかりではない。第一部『ハイジの修業時代と遍歴時代』のフランクフルトのゼーゼマン家にあって焼けつくような郷愁の念に耐えているハイジの心の状態を描いた箇所は、風景と精神の関係において重要な部分だ。

So waren Herbst und Winter vergangen, und schon blendete die Sonne wieder so stark auf die weißen Mauern am Hause gegenüber, dass Heidi ahnte, nun sei die Zeit nahe, da der Peter wieder zur Alm füre mit den Geißen, da die goldenen Cystusröschen glitzerten droben im Sonnenschein und allabendlich ringsum alle Berge im Feuer ständen.

(下線・筆者)

秋もすぎ、冬も行ってしまっ、早くもまたお日さまがむかいの家の白壁をキラキラとかがやかせはじめました。ハイジは、ああ、もうすぐペーターが山羊をつれてアルムへのぼってくるころだな、金色のみやまきんぼうげがお日さまの光にきらめき、夕方になると、まわりの山々がみんなもえるようにまっ赤になっているだろうなと思いがくのでした。

フランクフルトにあってもハイジが思うのはアルム(Alm)の風景である。

このアルムとはドイツ南部のオーバーバイエルン、オーストリアの一部、イタリア領南チロルの方言で、森林帯の上の草地(夏季放牧地)が広がる場所をさす。スイス・ドイツ語では高地放牧地はアルプ(Alp)だが、シュピリは随所で南ドイツ～オーストリア方言

のアルムを使用している。

スイス社会史の優れた研究者でもある森田安一の『「ハイジ」が見たヨーロッパ』によれば、『「ハイジ」のドイツ語初版では Alm-Öhi となっているが現在のドイツ語版は Alp-Öhi となっている』とある。しかし、私がテキストにしている 2020 年のドイツ語版では、人物のハイジの祖父を指し示すときはすべて ‘Almöhi’ で、場所を指し示すときは ‘Alm’ が使われている一方 ‘Alp’ も多用されている。森田は「いつ、あるいはシュピリ自身が修正したのかわからない。」と述べている。確かに印刷段階での印刷工の一部的なミス、あるいはその後の作者もしくは出版社の意図によって言葉が改変されてしまうことはある。ただ、ここで言えることはシュピリの執筆によってしか成立しえない初版において ‘Alm’ が使われていたということである。そこには、‘Alm’ という「方言」を使いたかったシュピリの心情があるはずだ。ここでは、岩波版の上田訳、角川版の松永訳にならぬ、現状のテキストで Alp となっている箇所も日本語訳は「アルム」とした。

なお、Alp には「高山の牧場」と「アルプス山脈」の二つの意味がある。

ちなみに物語には、アルムのほかにマイエンゼース (Maiensäß) と呼ばれる森林限界より手前に広がる草地(春と秋の牧草地)を指す言葉も登場する。酪農を営む人々は、山羊や羊などの家畜を冬は畜舎に入れておき、五月ごろから放牧地の高度を上げていき、真夏にアルムで過ごさせる。その観点からみると、物語の主要舞台になるアルムが実際に子どもたちが走りまわられる時期はそれほど長くはない。にもかかわらず、シュピリはアルムという言葉にこだわった。それは、Hochland (高地)でも Berg (山)でも Weid (牧草地)でもない ‘Alm’ に象徴的な意味を認めていたからだろう。アルムは地形学的かつ植生的な意味を持っているが、それ以上にそこに暮

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

らす人たちにとっての暮らしに関わる特殊な場所なのだ。あえて「スイスの標準ドイツ語」にせず、方言にしたのもその場所を眺める人の言い方を含めた地域的に重要な場所であることをニュアンスとして込めたかったからではないだろうか。アルムは「金色に」かがやく崇高な場所、孤高の人（アルムじいさん）が住む場所、そして、牧畜に生きる人々の暮らしの土地、この三つのことのメタファーとして位置づけられているのである。

物語の後半、アルムじいさんが、アルムにやって来たクララを車椅子から、ちょっとでいいから立ってみたらどうかと立たせようとして、毎朝少しずつ長く立たせてみるくだりがある。このあと、シュピリは緊張感のある二人の「訓練」からずっと視点を変えて〈風景〉を描く。その原文を試みに詩のように改行してみると、それが詩の文体に近いことに気づく。

Ein so schöner Sommer war  
seit Jahren nicht auf der Alp gewesen.  
Jeden Tag zog die strahlende Sonne  
durch den wolkenlosen Himmel hin,  
und alle kleinen Blumen machten ihre  
Kelche weit auf  
und glühten und dufteten zu ihr empor,  
und am Abend warf sie ihr Purpur- und  
Rosenlicht  
auf die Felsenhörner  
und das Schneefeld hinüber  
und tauchte dann in ein golden  
flammendes Meer hinab.

声に出して読むと、‘……ihr empor’ ‘…  
…die Felsenhörner’ ‘……das Schneefeld  
hinüber’ など、文節の語尾が音韻を揃えて  
いて、散文でありながら心地よい文章だ。そ  
んなところからも〈風景〉に託したシュピリ  
の詩心がうかがえる。その詩情を味わうため

に、あえて一行ごとに構成した場合の拙訳を  
添えてみる。

それはアルムでも何年もなかったような  
美しい夏だった  
それらの日々 雲ひとつない空では  
太陽がまばゆく移ろっていた  
無数の小さな花がその萼を開き  
天に向かって輝き匂っていた  
夕暮れどき 太陽は  
紫の あるいは薔薇色の光を  
角(つの)のごとき岩や  
雪原に投げかけ  
やがて 黄金に燃える海に溶け込んだ

12

### 3. 〈祈り〉と〈悔い改め〉

ハイジがフランクフルトからスイスに帰郷  
できたのは、ゼーゼマン家の主人ゼーゼマン  
の親友であり主治医のクラッセンの判断によ  
るところが大きい。一年間の都会の屋敷暮らし  
ですっかりホームシックに心身を蝕まれた  
ハイジを「慣れ親しんだ力強い山の空気のな  
かに戻し」てやらなければ不治の病になっ  
てしまうかもしれない（松永訳）と強く主張す  
るクラッセン。物語の登場人物としてはバイ  
プレイヤーだが、その存在の意味するところ  
は大きい。

クラッセンはハイジをアルムに帰したあと  
間もなく、妻を亡くしたあと生きがいにして  
いた一人娘を病で失ってしまう。そして、ハ  
イジのもとを訪ねたがるクララの体調がとと  
うの前に、自らの休養も兼ねて一足先にアル

12 本文で述べたように、2020年版のテキスト  
では、シュピリの原文には、ドイツ語方言の  
Almとスイス・ドイツ語のAlpが混在している。  
ここでは、岩波版の上田訳にならない、Alpの箇  
所も日本語訳は「アルム」とした。

ムを訪ねることにする。

ハイジは、フランクフルトでの自分の心の病を理解してくれたクラッセンをアルムに迎えて大喜びする。そして、クラッセンはデルフリから山登りをしてハイジと共にアルムの地面に腰をおろして語らう。

朝の風がしずかにそっとアルムに吹きわたり、夏にはむらがって咲いていた青いつりがね草の、ところどころにまだのこっている花があたたかいお日さまのほうへうれしそくに首をかたむけているのを、かすかにそよがせています。高い空では、鷹が大きな輪をえがいてとんでいます。でも、きょうは鳴きません。

季節は九月。夏が終わったアルプスの静けさと共に、娘を失って哀しみを抱いた男とその心に寄り添おうとするハイジの心的状態を写し取った風景描写である。

ここでハイジは、ペーターの祖母の家にあった讃美歌の本からの詩をクラッセンに朗読する。目の見えないおばあさんに頼まれてしばしば朗読する詩だ。引用された三節のうち最終節をみてみよう。

けれども おまえが心変わりせず  
御もとを去らずにいたならば  
お前には 思いもよらないときに  
御心をもって 救いたまうでしょう  
おまえが なんの いわれもなく  
背負いつづけた その重荷から  
つらい 悲しい その重荷から  
ときはなって くださるでしょう

これは 17 世紀の讃美歌詩人パウル・ゲルハルト<sup>13</sup>の詩の一節で『讃美歌 21』では 528

<sup>13</sup> パウル・ゲルハルト＝1607-1676。ドイツを代表する讃美歌作者。ルター派福音主義教会の

番「あなたの道を」となっている。原詩十二節のうち『ハイジ』では第八から十節までの三節が引用されているのだが、そこにはシュピリの意図がある。

『ハイジ』には四つの讃美歌が使われ、すべてハイジによって朗読されているが、もうひとつハイジがペーターの祖母に頼まれて読む詩をみてみよう。通称「お日さまの歌」<sup>14</sup>と呼ばれ、原詩は十二節あるが、「苦しみも 悲しみも」からをもう一度と頼まれたことにより、最後の二節がおばあさんのために二度朗読される。

苦しみも 悲しみも  
いつか 終わりがくる  
わきたつ海は しずまり  
ざわめく風も ないで  
待ちのぞみし 陽はかがやく

あふれる よろこびと  
やすらかな しずけさを  
わたしは ただひたすら  
天の園生に 乞いねがう  
心は はや そこへとむかう

それまで暗い顔をしていたおばあさんは、この朗読を聞いて「気持ちか、とってもあかるくなったよ！」とハイジに感謝する。この引用にもシュピリの意図がある。

おばあさんに読んだ詩にもクラッセン医師に読んだ詩にも共通点がある。「背負いつづけた その重荷から／つらい 悲しい その重

牧師であったが教義的に堅苦しいものではないわかりやすくあたたかい詩風が広く愛された。ドイツ抒情詩の先駆けの詩人とも言われている。

<sup>14</sup> 「お日さまの歌」＝これもパウル・ゲルハルトの詩で原題は「黄金の太陽は、喜びと幸せに満ちて」。



ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

荷から／ときはなつて くださるでしょう」と「苦しみも 悲しみも／いつか 終わりがくる」という箇所だ。これは二つの詩の要になっている詩句でもある。シュピリはどのようにしてこのような詩を選んだのだろうか。

シュピリの母方の祖父は牧師であり、母は宗教詩を書いた詩人であった。曾祖母の代からキリスト教敬虔主義<sup>15</sup>の熱心な信者であった家系でシュピリもまたその強い影響下にあった。敬虔主義は、日々の暮らしに根ざした「生きた宗教」をめざしたと、『ハイジ神話』（川島隆訳）の著者ジャン＝ミシェル・ヴィスマールは述べている。教会での牧師の説教よりも個人的な祈りの方を重視。教義よりは個人の内面の信仰を重んじ、教会に余り縛られず神へ自然に向かい合うことを称揚していた。そういうところが山を仰いで神を思うという精神性につながっていたのかもしれない。

ただ、後述するシュピリの初期作品『若い頃』では主人公の「私」は親しい友・マリーがキリスト教再洗礼派<sup>16</sup>に傾くことに反対したりしている。そのほか、登場人物たちと「私」との宗教についての意見の食い違いを描いた部分を読むと、シュピリはキリスト教に対して母たちほどの盲目的な信者ではなかったと思われる。シュピリの父は外科医と精神科医を兼ねた医師であった。その科学的・理性的な血もまた流れていたはずである。そしてそれ以上に、ドイツロマン主義文学の先行者でもあるゲーテを愛読し、19世紀半ば過ぎまでの豊かなドイツ文学を読むことが出来たシュ

<sup>15</sup> キリスト教敬虔主義＝17世紀末にアルザスの牧師フィリップ・ヤーコプ・シュペーナーの著書『敬虔な望み』で説かれた教え。プロテスタントの中の宗教運動のひとつ。

<sup>16</sup> キリスト教再洗礼派＝幼児洗礼を否定し成人の信仰告白による成人洗礼を重視。反教権的に過激でもあったために迫害もされた。プロテスタント福音派のひとつ。

ピリは、信者である以前に、宗教を超える知性を重んじ、かつ、何よりも詩情を愛する人ではなかっただろうか。『ハイジ』に讃美歌が頻出するからといってこの作品をキリスト教的教えの具現化とばかりみることは一面的である。宗教と共に歩みながらも、より大きな精神（Geist）の遍歴をシュピリは描きたかったはずである。

敬虔主義の性格にしても、ヴィスマールは敬虔主義は合理性の対極にあるロマン主義<sup>17</sup>の宗教だったとも述べている。そうしてみると『ハイジ』をドイツロマン主義から伸びた枝の果実とみることも出来よう。

ハイジはまた、体調の悪いペーターのおばあさんに次のような詩を読む。19世紀ドイツの讃美歌作者カール・シュピッタ<sup>18</sup>の詩からの引用である。

この目が暗くかすんでくれば  
わたしの心を照らしてください  
たのしく御もとへ行けますように  
ふるさとへ帰る旅人のように

これを読んだハイジは言う。

「おばあちゃん、ふるさとへ帰る旅人って  
どんなか、わたし知ってるわ。」

「ふるさとへ帰る旅人」がどんなものか知っているというハイジ。もちろん、物語とし

<sup>17</sup> ロマン主義＝合理主義よりも主観や感受性に重きをおいた芸術運動。文学、音楽、美術など多岐にわたる。18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパ各地で盛んになったもので、ゲーテの『ウィルヘルム・マイステル』を先行作品としてあげる研究者も多い。シュピリもその影響を受ける立場にあった。

<sup>18</sup> カール・シュピッタ＝1801-1859。ルター派の神学者。19世紀ドイツを代表する讃美歌作者。

ては、フランクフルトの都会での暮らしに窒息してアルプスに戻って来たのだから、ハイジはその体験を通してこの言葉を語っているとみることができる。しかし、九歳の少女としては少し早すぎるこの言葉をハイジに言わせることでシュペリは、読者にハイジではなくアルムじいさんのことに思いが向かうように仕掛けている。

実のところ、表層部分ではハイジを主役にしながら、シュペリの主眼は、おばあさんよりもクラッセンよりもこの物語で大きな存在であるアルムじいさんの存在を描くことにあるように思える。引用の詩や聖書の挿話がごとごとく彼の人生に重なってゆくからだ。

アルムじいさんは、多くの人が教会に集う地域社会で、いつの間にか教会にも通わない人間になっている人間である。そのアルムじいさんとハイジが神について語らう。アルムじいさんは「神さまに忘れられた人間は忘れられたままなんだ。」と語る人である。

そのような「すねた偏屈者」でありながら、ハイジを受け入れてあたたかく育てるアルムじいさんである。山羊飼いのペーターに頼られる父親役もアルムじいさんだ。悲しみに沈むクラッセンの気持ちを理解して友人になるのもアルムじいさんだ。アルムにやって来た脚が萎えているクララを立たせてみようとするのもアルムじいさんだ。そうしてみれば、アルムじいさんこそこの物語のもう一人の主人公と言えよう。そしてこの男は、若き日に放蕩を尽くし人殺しまでしているらしい罪深い人間である。

ハイジは「ふるさとへ帰る旅人」という概念をどこで学んだのか。それは、クララのおばあさんから貰った絵本の一ページからだ。そこには聖書のルカによる福音書にある「放蕩息子の帰還」<sup>19</sup>の絵があった。ハイジはい

たくその絵に心打たれたとシュペリは書いている。家を出て親を裏切り放蕩の限りをつくした息子が身も心もぼろぼろになって故里に帰って来る、その時、父親は息子を許し、帰って来たのだからそれでいいと受け入れるという聖書の一節を描いた絵である。

この挿話は、アルムじいさんの人生を語っていることにほかならない。これといった産業も農産物もない山国スイスの男たちは長い間、ヨーロッパの大国に傭兵として出稼ぎに出て、ただ金銭を得るために殺し合いに従事した。物語の後半で触れられているが、それで大金を得て故郷に屋敷を建てるような人間もいたが、アルムじいさんのように、異国で過ちを犯し身を持ち崩した男も少なからずあったただろう。やむなく故里に帰ったものの自責の念は収まらない。村人たちも冷たい。そんな男を受け入れてくれたのは「山」だった。時をへても変わらずに聳え立ち、大きな腕で抱きとめてくれるもの、それが故里の「山」だ。(おじいさんの出身地はマイエンフェルトから約 35Km 離れたドムレシュクだが、ここで言う故里は遠い異郷に対しての育ったところと同質な自然環境のそれである)。そして、故里以上に重要なのは「山」である。シュペリは傷ついた心の人の帰ってゆくところとしての山岳を描きたかったのである。宗教的には、罪人を許し受け入れるのは「神」であるだろう。多くの讃美歌を挿入しながら物語を展開したシュペリも意識の上層ではそうした意図を持って書いたであろう。けれども、意識の深層には、彼女が日々眺めていた山岳があったはずだ。

「放蕩息子」の話聞いた夜、アルムじいさんはハイジの寝顔をみつめ、涙を流し悔い改める。

<sup>19</sup> 「放蕩息子の帰還」=『新約聖書』ルカ伝福音書、第 15 章 11 節から 32 節まで。このよう

な題がついているわけではないが、一般にこのように言われている。

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

それからほんの二、三時間ののち、朝の最初の光がさすなか、アルムじいさんは山小屋の前に立って、はれやかな目であたりをながめていました。日曜の朝が、山や谷にキラキラと光りかがやいていました。朝の鐘がひとつつたつ、谷から聞こえてきます。もみの木のこずえでは小鳥たちが朝の歌をうたっていました。

物語はこの後、フランクフルトでハイジが話し相手をつとめているうちに親友になったクララがアルムにやって来て、アルムじいさんの助言で、車椅子から立ち上がるように努力をする。そして、ハイジとペーターの助けでクララが自分の足で歩くようになり、やって来たゼーゼマンやその母によって、ハイジの功績が讃えられ将来も経済的に保証されるという大団円を迎えて終わる。

こうした言わば出来過ぎのハッピーエンドに至る展開に『ハイジ』を善人しか登場しない子ども相手の人格形成小説と捉えている人は多いだろう。しかし、『ハイジ』の本質的な価値は、苦しんだ人間を受け入れる存在として「山」があるのだということを陰に陽に語りつづけたことにある。人は「山にむかひて、目を挙ぐ」。そして静かに激しく内省する。詩人の手によって風景として活写された「山」には人の心が溶け込んでいる。

#### 4. シュピリ作品に変わらずに流れるものとシュトルムとの近似性

前述したテーマは初期作品のころからシュピリ文学には流れている。そのことに少しばかり触れたい。

『ハイジ』より八年前の1871年に刊行された処女作『フローニの墓に一言』（田中紀峰訳）はしみじみとした回想記だ。

山里で育った「私」の学校時代の友・フローニは、「人の心を開かせたり、授業を進展さ

せたりする、素晴らしい能力を持ち合わせていた。」。しかし、貧しい教会番の娘で、学校を卒業すると粗野な若い大工と結婚。やがて「私」は、夫の暴力を受けて変わり果てたフローニを見かける。その後彼女が消息を絶つてから十年余りがたち、「私」が住む町の病院にフローニが入院してくる。二人はかつての友情を取り戻しフローニはこれまでのことを語る。夫から逃れようと教会へ行ったらが牧師は「あなたの夫がいる家に帰りなさい」と説いた。思い悩んだフローニは亡くなった母が持っていた「古い歌を集めた本」をみつけ、そこにある詩を読みふけたという。このところは、『ハイジ』に出てくるペーターの祖母が大事にしていた「古い歌の本」に照応している。讚美歌の詩集である。フローニはそこにある詩句に癒されて死んでゆく。長い旅から帰り、それを知った「私」はフローニが眠る丘を訪ね、墓の上に一切れの紙をおく。「お休み、地上の寝床で。」と書いた紙を。

物語は冒頭に墓参りの場面があり、若かった日からのことが回想される形式をとっている。作中に挿入されるゲーテをはじめとした詩人たちの詩に乗せて青春の輝きとその後の心の傷みが綴られている。

ここでもシュピリの風景に込めた思いは深い。

そこにはトネリコがざわざわと音をたて、空がだんだんと夕日で金色に変わって行った。ピラトゥス山の薄暗い断崖絶壁が明るい夕空に浮かび上がり、夕焼けの中に、心があこがれるような緑色の丘が横たわっていた。それから、近くの教会の鐘が鳴ると、私たちは立ち止まって耳を傾け、遠い岩山の消えそうになる光を眺めるのだった。

フローニは若き日に故里を捨て、亡くなる前に故里と和解している。そして、フローニが亡くなった後、山里の教会には、フローニ

の夫だった男が隠れるように座っているのを見かけるようになる。男は悔い改め頭を垂れているのである。

1872年に刊行した『若い頃』は、子ども時代から思春期を共に過ごした友人たちとの交友を振り返る回想である。「私」と親しいマリーが好意を抱いている少年ヨハネス、すまして高圧的なリゼ、気さくなルディたちの中で「私」は少し浮いているが何とかみんなと付き合い合っている。「私」はミルクをもらいに隣村からやってくるマイエリという女の子のことが気にかかっている。吹雪の季節でも薄着で働いている貧しい少女。そんなマイエリを冬の間ルディが付き添ってあげているのを見かけるが、春の訪れとともにマイエリは死んでしまう。「私」は新しい友で都会派のクララと出会うが、ほどなくして「私」は次の学校へ進むために友人たちと別れて旅立つ。四年の歳月をへて帰郷、マリーやクララと再会。幼馴染のマリーはヨハネスが好きだったが、ヨハネスが積極的に言い寄るリゼと付き合い合っている様子に悲しんでいた。しかし、やがてマリーは「私」の知らない男と結婚し交友から遠ざかる。マリーと再会し宗教観の違いを語り合い、幸せな結婚をしたルディたちを訪ねたあと「私」は少女時代から好きだったモミの林にあるベンチにすわり感慨にふける。

「私」の友人たちとの関わりから、神とは何かということや、失恋や、平凡な幸せの価値などが描かれるが、ここでは、マリーやクララの青春期特有の葛藤があり、彼らへの「私」の宗教的かつ精神的な違和感も述べられる。そこで鍵となっているのは「私」の「離郷」と「帰郷」だ。そして、最後に置かれるのは、物語の前半に登場したミルクを運ぶ薄幸の少女のことである。教会の鐘の音が、「私」には亡くなった少女のためのレクイエムのように聞こえる。

丘の上のモミの木は今も寂しく立っていて、その古枝を山の風が揺らしている。ベンチには、若い家族連れが座っている。枝にとまって鳴く小鳥たちが「ああ、なんと早いのか」と歌っているのが、彼らには聞こえているだろうか。

物語の主筋にはない小さな存在の死をもう一度最後に持ってくることで、この作品は文学的な深みを増している。

『フローニの墓に一言』でも『若い頃』でもそうだが、青春の傷みと後悔が主旋律として流れている。そのことを通して、作品は静かな抒情を醸し出している

そうしてみると、シュピリの初期作品は、19世紀半ばに活躍した北ドイツの作家テオドール・シュトルム<sup>20</sup>を彷彿とさせる。追憶を通して人間の心の奥底に眠るものを取り出し、人の命の無常さを哀しみと共に伝えるシュトルム。シュトルムの『みずうみ』や『聖ユルゲンにて』などがそうであるように「離郷」と「帰郷」にまつわる主題は『ハイジ』にも流れている。「離郷」と「帰郷」の間に横たわる心の変化を照らし出すのは故里の自然であり〈風景〉だ。シュピリは、〈風景〉に生きてあることの光と影を思う心情を込めた抒情詩人なのである。絵筆のごとく言葉を使った抒情的風景画家の作品として『ハイジ』をみつめなおしたい。

---

<sup>20</sup> テオドール・シュトルム=1817-1888。ドイツの作家・詩人。故郷を離れたために恋するエリーザベトを失ってしまったラインハルトの回想を綴った代表作『みずうみ』が書かれたのは1849年。シュピリは22歳。ピアノ造りの老人が五十年ぶりに故里を訪ね、若き日の恋を自責の念にかられながら語る『聖ユルゲンにて』は1867年の作。シュピリが『フローニの墓に一言』を刊行したのは1871年。

ヨハンナ・シュピリ、風景に込められた心  
～『ハイジ』を中心として

〈参考資料〉

1. Johanna Spyri “Heidis Lehr- und Wanderjahre “. “Heidi kann brauchen, was es gelernt hat“ (Independently published)
- 2.ヨハンナ・シュピリ『ハイジ』(岩波少年文庫＝上田真而子訳)
- 3.ヨハンナ・シュピリ『アルプスの少女ハイジ』(角川文庫＝関泰祐、阿部賀隆訳)
- 4.ヨハンナ・シュピリ『アルプスの少女ハイジ』(角川文庫＝松永美穂訳)
- 5.『スピリ少年少女文学』全12巻(白水社)
- 6.『太宰治全集』(筑摩書房)
- 7.志賀重昂『日本風景論』(岩波文庫)
- 8.島本恵也『山岳文学序説』(みすず書房)
- 9.伊藤秀五郎『北の山』(中公文庫)
- 10.アーダルベルト・シュティフター『水晶』(岩波文庫＝手塚富雄訳)
- 11.『聖書』(日本聖書協会)
- 12.『ヨハンナ・シュピリ初期作品集』(夏目書房新社)
- 13.ジャン＝ミシェル・ヴィスヌール『ハイジ神話』(晃洋書房＝川嶋隆訳)
- 14.森田安一『「ハイジ」が見たヨーロッパ』(河出書房新社)
- 15.森田安一『「ハイジ」の生まれた世界』(教文館)
- 16.ちばかおり・川島隆『図説・アルプスの少女ハイジ』(河出書房新社)
- 17.松永美穂『100分de名著 シュピリ アルプスの少女ハイジ』(NHK出版)
- 18.ヨハン・ウォルフガング・ゲーテ『ウィルヘルム・マイステル 修業時代』『ウィルヘルム・マイステル 遍歴時代』(筑摩書房＝関泰祐訳)